資料編から在来産業を考える

静岡県には、豊かな自然環境と大消費地に近接した立地条件を活かし、長い歴史と伝統の中で多様な在来産業が育まれてきました。

近現代八（産業･経済）掲載資料（35、36 頁）

15 〔静岡市輸出木製雑貨品の発祥と構成、構造〕 1978・3

静岡県立中央図書館所蔵

県中小企業総合指導センター『静岡市輸出木製雑貨品（宝石箱、食卓台所用品等）製造業産地診断報告書』、1～34 頁

Ⅰ　産地の沿革と静岡市の産業における地位

1．産地の沿革

（1）診断の対象事業

静岡市には、戦前からの伝統ある漆器、下駄、鏡台、雛具、木製文具等の木工品、戦後業種転換を遂げたケミカルサンダル、そして木製品宝石箱、木製食卓台所用品、仏壇等数多い地場産業が産地を形成している。

今回は、これら数多い地場産業の中から「木製宝石箱」、「木製食卓・台所用品」等を主とする木製雑貨品製造業を取り上げて産地診断をすることとした。この産業は市場を世界に求めて発展してきたので広く「輸出木製雑貨」とか「輸出雑貨」と呼ばれているが、いわゆる「輸出型地場産業」である。

第6回　県輸出雑貨見本市　〔昭和46 年版〕

第6回見本市には102 社、4団体が参加し、宝石箱や竹製品などが出品されました。

16 『静岡県の木製品雑貨（統計資料等）』〔抄〕 1988・3

静岡県庁所蔵

県商工部地場産業課『静岡県の木製品雑貨（統計資料等）』、1～23 頁

家具

（1）沿革

〔前略〕戦後は、座鏡台と姫鏡台が生産の中心となっていたが、順次、三面鏡や洋鏡台へと洋風化が進み、30 年代後半からはドレッサーやサイドボードが新商品として開発されるなど、生活様式の変化や所得水準、生活水準の向上によって家具の需要は拡大し、新材料や新技術の開発もあって飛躍的な発展をとげ、全国屈指の総合家具産地を形成するに至った。〔中略〕

木製宝石箱等（輸出雑費）

（1）沿革

木製雑貨産業は、従来輸出によって発展してきたもので、一般的には「輸出雑貨」と呼ばれ、木製宝石箱、木製台所用品を主として生産してきた。

静岡の木製雑貨の起源は、江戸時代末期に長崎から漆器が諸外国に輸出されたのが始まりといわれ、伝統的な漆塗り技術の集積がその根底にあった。

静岡の漆器は、我が国の重要な輸出品として、大正初期まで盛んに輸出されたが、第一次世界大戦がはじまると市場であったヨーロッパ諸国が戦場となり、漆器の輸出は衰退していった。しかし、第二次世界大戦後、進駐軍のみやげ品として、オルゴール付宝石箱が売れたのを契機にアメリカへの輸出が増大した。

静岡市で開催された静岡鏡台家具見本市〔昭和53 年版〕

伝統的な鏡台生産の工芸技術が活かされたサイドボード

第２節　在来産業とその政策

静岡県は他都府県に比べて県域が広く、歴史的にその特色を形成した拠点都市を中心に、人口面でも生産面でも比較的バランスがとれている県といってよいだろう。

まさにこれに照応して、在来産業が育ってきた。すなわち島田市の製材業（資料 13）・製紙工業（資料 27）、富士市の製紙工業（資料 18、24、28）、同市及び沼津市中心の戦時工場疎開から発展した機械工業、静岡市、旧清水市中心の江戸時代に淵源を持つ漆器、家具、仏壇仏具（資料 14、15、16）、近代工業の創始以来の造船業、アルミなどの金属工業。地域で得られる資源活用型の缶詰工業、合板工業。さらに高度成長期に木工玩具から展開した石油化学由来のプラモデル工業、あるいは塩化ビニールの開発を受けて，伝統的な杉下駄製造業からサンダル製造業が展開する（資料 17、20）。また浜松を中核とする西部は、江戸時代以来の綿作に起源を持つ綿織物業（資料 19）が戦後復興によって輸出産業としても展開する。要するに在来産業を基盤に先進的新規工業分野が成立していったのが静岡県産業発展の特徴といってよいだろう。

浜松を代表する楽器工業〔昭和37 年版〕

所得の向上にともなう楽器需要の高まりを受け、昭和36 年には目標の 100 億円を大幅に上回る 123 億円の生産実績を記録しました。浜松は、全国の楽器生産額の約 90 パーセントを占めていました。